

長い廊下を歩きながら、煙鬼はため息をついた。

(幽助達は大丈夫かのう・・・。)

ため息の原因は、昔なじみの喧嘩友達の息子とその仲間のこと。

旧友の雷神が死に、その墓参りに行って、紆余曲折を経て、今は魔界の統治者として大統領をしている煙鬼。

こうなるまで、いろいろあったが、とにかく魔界で1番偉い責任者をしている。

数年単位で変わるということになった魔界の覇者の任期も、あと少しで終わりを告げる。

そんな時期に、厄介ごとが発生した。

『人間に迷惑をかけない』という自分の法律に反する輩が現れ、雷神の息子の友達の彼女(?)を誘拐したのだ。

敵は大掛かりな組織で、自分達の罪を誤魔化すばかり、それを暴こうとする幽助達を行政的な方法で攻撃してきた。

悪事を働いている証拠がなかったこともあって、犯人はわかっているのに拘束までには至らなかった。

そして今日は、その行政的な方法で敵から訴えられた幽助達の処罰を決める日であった。

(言霊で知らせたとはいえ・・・審判会までに、幽助達が戻らなければ、幽助達は無事では済まんぞ・・・!?)

時間は開始15分を切り、煙鬼のいらいは募る。

「どうかしましたか？」

そうして、渋い顔をする煙鬼に1人の男が声をかけてくる。

「・・・なんだね？」

「随分、そっけない言い方をなさいますね？」

「それはあんたが、1番わかってるだろう、漆黑。」

ずうずうしい犯人である、Mの会のメンバーの漆黑だった。

コイツ以外にも犯人がいて、そのうちの1人を幽助達が倒したのだが、それが今回の議題となっていた。

顎鬚を撫でながら厭味っらしく男は言う。

「そういえば、雷禅のご息はお元気ですか？今日はお見かけしませんか？」

「もうすぐ会えるだろう。」

「ですが、あと5分もすれば会議が始まりますよ？間に合いますかね～魔族でも死ぬ場所に、妖怪の出来損ないが行きましてもね～」

「貴様！！」

途端に、周りのガラスが大きく揺れる。

それで側にいた妖怪達が凍り付き、そう言った本人に煙鬼は怒鳴る。

「もう一度、雷禅の息子のことをそう言ってみろ！次は容赦せんぞ・・・！？」

牙をむき、目を赤くする相手に楽しそうな声を出す漆黒。

「申し訳ありません。今後は気を付けますよ・・・大統領が可愛がってらっしゃるお子さんですからね・・・？」

そう言い残すと、余裕の態度で煙鬼から離れていく。

見ていた者達が、大丈夫ですか？と駆け寄った時、彼は元の穏やかな顔に戻っていた。

(わしだから、よかったようなものを・・・！・・・孤光がいなくてよかったわい。)

いや、他の奴らでなくてもよかった。

勘違いされがちだが、雷禅と喧嘩が出来なくなったから隠居しただけで、力自体は隠居するほど衰えてない。

喧嘩をしていた頃の雷禅には劣るが、あんな小者など一ひねりできる。

Mだか**S**だかいう集まりも、片付けるなど造作もないこと。

ただ、力のみで、そんなことをしては、雷禅の息子が作ったものを壊してしまう。

わしらに与えてくれた生きがいを、ダメにするような真似はしたくない。

わしも含めてみんな、雷禅の息子という肩書抜きで『幽助』のことを気に入っているのだ。

そう思った瞬間、時を知らせる鐘が鳴る。

(間に合わなかったか・・・！)

そんな思いで会議室へと入る。

ここに集まったのは、魔界では名の知れた要人ばかり。
黄泉は修行（子育て）のため、軀はパトロールが多忙なため（？）来れたら来るということ
でこの場にはいない。
それでも各人、それなりの勢力を保持しており、無視できない者達。
気の合う者もいれば、先程のような輩もいる。
それをまとめているわけだが、今日ばかりは特に気を引き締めなければいけない。

「では、始めましょう。雷禅国、前国王の子息・浦飯幽助以下、数名による M の会所属の
商人・闇麻呂への殺害等の件に関しまして。」

（幽助達の人生がかかっているからな・・・！）

司会進行を務める男の言葉が反響する。
こうなっていることを幽助達に伝えるため、霊界の王子まで巻き込んだ。

（・・・というよりも、幽助がその霊界のために仕事をしているから、コエンマがこちら
に出向くのは当たり前か。）

そうやって手を貸したが、やはり彼らは、今日のこの場には間に合わなかった。

無理もない。
敵の本拠地は、妖怪のわしらでも行かない場所。
人間もいるのに、たった5日・・・いや、蔵馬が起きるのを待っていたから、実質3日。
そんな短期間で往復は出来ん。

（それ間に合う方が、どうかしてるかもしれん。）

だが、あいつの息子なら・・・幽助とその仲間だからこそ、やってのけそうな気がした。
不可能を可能に出来るんじゃないかという気持ちにさせてくれた。
信じる心は今も変わらない。
だから、わしはわしに出来る方法であの子らを助けるだけだ。

（こうなれば、わしがこの場で何とかするしかない。）

そう覚悟を決めると、魔界の統治者である自分の席へと腰を下ろす。
煙鬼をはじめとした関係者全員が席に着く。